



アジア小説との出会い



多谷 昇太

みずからの生き方においてなにか行き詰まりがあったとして、またそれに至った由来とそれへの対処法、すなわち処方箋さえわかっていたときに、それでもなおかつ肝心の、具体的な「行動」に踏み出せないという自分がある。その状態に甘んじて実に久しい。私の場合ヒト・モノ・コトへの色眼鏡をはずすことと、いままでの自分本位な生き方から、少しでも他人指向のそれへと移ることがみずからに課した処方箋だったのだが、云うはやすしでなかなかできない。およそ万事においてあいも変わらず「しよせん世間とは、社会とは…」などと突き放してしまい、他人様への対応においても、あたかも自動回路のごとくいままで培ってきた自分本位の眼で見、応じてしまう。それで、これではならじとばかり、なにかうまい方法はないかと案じた挙句、一計を思いついた。ひとついままで悉皆目の行かなかった中国や韓国、あるいは東南アジアの国々の現代小説を読んでみようと思ひ立

ったのである。理由はそもそもいまに至る自分の嗜好や価値観がいたって西洋的で、近隣のアジアに目が行かず、横柄にもこれらの地域・国々は日本や西洋よりも一段下の文明レベルではないのかなどと思ひもし、加うるに昨今の中国や韓国の反日ぶりを報道で見るとつけても、両国への反発を覚えてしまうことなどがあつたからである。つまりは先の色眼鏡をはずすことと、我ならぬ他者を理解して行くうえでツールになり得ると思つたからだ。まず手始めに21世紀の新たな超大国などと云われている中国から手をつけ、お隣りの韓国そしてミャンマー、ベトナムへと読みすすんで行つた。長編ではなく各国の短編集ばかり。肩がこらないと思つたからだし、またできるだけ多くの作者、「他者」に出会いたいと思つたからだ。ちなみに件の処方箋の由来、斯く「行き詰まつてしまった」顛末とはみずからの人生における散らかしつ放し、すなわちひたすら自分を生かさそうとするばかりで他人を慮らず、あげく年令をかさねるとともに誰からも相手にされなくなつてしまったことが上げられる。しかしそれでは畢竟この試みも他人を介した自助、すなわち他人指向という隠れ蓑をまとつた相変わらずの自分本位ではないのかと指摘もされようが、しかしそこは「改めるに憚ることなかれ」という言葉を信じて突き進むほかな

い。なにことも修練であり鍛錬であり、また人間というものには多分にソフトであるよりはハードなのだと思うからである。プログラミングの良し悪しによつていかようにでも良品・不良品を生産し得る機械のごときもの。ただしみずからしてプログラミングを選び得る、自由意志を持つた機械なのである。ここはひとつ、人間などとは次元の違う、プログラマーの全能を信じて行くほかはない。

さてまず中国だがたまたま手に取つた短編集の解説欄に「文学の生まれる根元の場合は、常に政治に取り巻かれていなければならぬ。それが文学の花を咲かせるための苛烈な自然条件である(竹内好氏)」とあり、さらには「中国は重層的である。歴史、文化、言語などの多様性と可変性があり、これを安易に日本の常識で一面を見て図つてはならない(佐治俊彦氏)」とあつて、私は短編集読了後痛く両氏の言に納得させられた。また「この百年だけでも中国には列強の侵略や二度の革命、その間の水害旱害、はては文化大革命の大殺戮までもがあり、これらが中国現代文学の進行に与えた影響ははかり知れない：文学はそこから(それらの熾烈な事象や政治環境から)逃げてはならない」という丸山昇氏の総解説にも深くうなずかされた。この三氏の言う「文学」を「人間」に置き

かえてみればいいのだ。昨今の先進諸国の経高政低、効率実益至上主義の様相を方やとし、一方かつての軍国主義時代の日本や前期文化大革命時の中国、また現北朝鮮などの政治的桎梏を方やとすれば、我々はその両極の間にあつてそれらに振りまわされながらも、また血と汗を流しつつも、なお、人間存在の原点と理念を追い求めて行くものだからである。それを人間一個人に置きかえてみるならば、苦楽両端(換言すれば過度の欲望と行き過ぎた克己心)の愚を無窮として、そこから離れて、中道・中庸の道を行くことが肝要なのだろう。文学こそはその為の先兵となるべきで、敵前逃亡は許されない。

さてこのような観点を三氏の解説から抱かされつつ、またわが行き詰まりと処方箋を忘れることなく、中国現代小説集を読み終えてみたのだが、まあ、その折りの激震といったらなかつた。わが色眼鏡は粉々に粉碎され、(時空をさえ超えた)中国人民の総体的プロフィールを認識させられ、彼らの気高き魂の有様を、最精微なる無色眼鏡で見せられることとあいなつた。でき得れば読んだ小説すべてのあらずじと感想をしるしたいのだがそうも行かないので、わが処方箋からの最適なる妙薬と思われる一編をここでは取り上げてみたい。

それは「蓮花池」という中国の抗日戦争時に書かれた

作品で、作者は蕭紅という抗日日に生涯をささげた、享年わずか31才の、同国東北地方出身の女性作家である。わが国の彼の天才作家たる樋口一葉に似た境遇もさることながら、その人の心の機微を描く確かさ、小説という力を信じ切った構成力の凄みと綿密な下調べはいずれも大したもので、こちらの方においてこそ、一葉との酷似性を感じさせられる人物である。すでに感受性も朽ち果てた63才(当時)の爺の私でさえ、読後、恥ずかしながら、涙を禁じ得なかった。書中に「漢奸」とあつた、日本軍に協力して同国人を密告する男への痛憤をいだかされるほどにも、進んで色眼鏡をはずされる思いがしたのである。

あらすじを述べれば、小豆(シャオトウ)なる5、6才くらいの男の子がいて、父は病死し、母は貧窮きわまる寡婦暮らしを嫌って、小豆を祖父に託したまま男をつくって出て行ってしまふ。しかしその祖父はすでに老齡であり時局もあつて仕事に就けず、止むを得ず墓荒らしを生業とするにいたる。真夜中に墓室に忍び込んで遺体とともに埋葬されている指輪や装身具などを盗み、それを金に換えていた。みずからはもはや死にさえもしいのだが残す孫の小豆があわれだったのである。他方幼い小豆の楽しみ、夢と云えばわが家の近くにある(窓か

ら見える)蓮の咲く池に行つて、そこで蓮の花を見たり虫とたわむれたりすることだった。しかし家の外に出れば墓荒らしの子と云つて近所の子供たちに必ず殴られるので、夢は夢でしかなかつた。そんなある日「じいちゃん」は小豆を連れて街に出る。最近きびしくなつた日本軍による風紀取締りに対して、「賄賂をやれば見逃してもらえる」という漢奸の言葉を信じて、墓から盗つた銀の指輪を持参して渡し、合わせて行きすがら小豆に屋台で煮物を馳走しようというのだった。小豆のボロ服は破れてつくりもせずお尻が半分見えるありさまだ。貧しく孤独な小豆にはじいちゃんがすべて。屋台の前で立ち止まり小豆に「煮物を」食べたいか?と祖父が聞くが内心手持ちの小銭で勘定が足りるかと逡巡もしている。「その時首を立てに振つたのか、横に振つたのか、小豆は忘れてしまつたが…」と原文にあり、このあたりは祖父を思いやる小豆の心根を描くに絶妙の冴えといふもので、蓮花池に寄せる小豆の想いの描写ともども圧巻である。日本軍憲兵に指輪を渡し、そのあとで別の品を金に換えてと思ひ直して、その場は食べさせずに行くのだったが、豈図らんやそれは果たせなかつた。賄賂と盗みを咎められて祖父は鞭打たれることとなつてしまつたのだ。気配を察した小豆が床に転がって狂つたように泣き叫ぶのを、

日本兵が思いっきり蹴飛ばした。壁まで飛ばされた小豆はいくばくもなく絶命し、祖父は絶望の無為のままに残される…。

以上だがこれを以つて歌劇「白毛女」のごとくに安易な（日本軍への）指弾に走るものではない。そこには、鬼畜、日本軍へのマイナスイメージとなるような作者蕭紅の綿密な構成力が働いている。もちろん三光作戦等であるに行われた住民皆殺しの日本軍の蛮行を、あるいは上海における殺戮などを否定するものではまったくないが、この鬼畜の行ないはなにも日本軍に限ったことではない。残念ながらおおよそあらゆる戦場で、また侵略地として為された、また今も為され続けている、人間の持つ原罪に絡んだ、闇の想念の表出なのであり、あらゆるTPOを超えて、我々がみずからして変え行かねばならないものである。この意味でなら蕭紅の構成に大いに組するものである。

それはそれとしてではなぜこの作品を取り上げたのかと云うと、それはあくまでも先の中庸を射った作品としてそうしたのである。作者蕭紅は小豆に象徴された無垢の存在に、また蓮花池という天国の具現にこそ殉じたのだと思う。先に「抗日に生涯を捧げた」と紹介したのは著者紹介にそうあったからで、決してそのみにおさま

る人物ではない。他のプロフィールとして「中国フェミニズムの祖」なども記されているが、それが他人から見た彼女の一面の像でしかないのと同じことである。彼女の実像をキャッチコピーするならば「人間と人間社会への）疑問↓抗い↓追及」とでもなるうか。蕭紅は中国東北部の地主の子として生まれたがその父が決めた結婚を嫌い、昔ながらの中国封建性を嫌って、家から出奔してしまつた進歩的な女学生であつたという。しかしその後二年間の放浪で辛酸を舐め尽くすと記載されている。その後もあたかも日本軍の進撃から逃れるように上海から西安、重慶へと移り住まねばならなかつたことと、共産党前身の出身者である夫蕭軍との軋轢などが、前記の彼女の作家像を形作つてしまつたのだと思う。しかし後に（25才の折り）彼女は半年間ほど日本に留学させられており、またフェミニズムというよりは夫蕭軍のDVに抗つたというのが実像で、畢竟（誰でもそうだが）この世の軋轢に悩み、毀誉褒貶に振りまわされながらも前記の根本命題である、人間存在の原点と理念を追い求めるに至つた作家だつたということである。小説「生死場」において弱き者、虐げられた者たちへの同苦同悲と、共有へと、やがて透徹して行く…。



〔右は蕭紅と彼女の夫蕭軍の写真屋における肖像写真。黒竜江省呼蘭県から夫とともに着の身着のまままで文豪魯迅のもとに身を寄せる。その魯迅の援助で二人して作家デビューした時に撮ったのがこの一枚。作家らしく見せようと前の晩に徹夜して蕭紅は夫の為にル・パーシカ風の衣装を縫った。みずからは写真屋の備具にあったパイプを（吸いもしないのに）こちらも作家らしく見せようとして啜えてみせたのである〕

さてこの他にも「上海のフォックストロット」といういかにも斬新で小気味のいい作品があった。こちらの作者穆時英などは蓮花池で云えば漢奸となつてしまふそうだ。事実日本軍協力の廉（かど）で国民党軍に殺されたのだが、私に云わせれば漢奸どころか漢雄だ。後の台湾における国民党軍の白色テロや、現中国の経済に驕った姿まで予見したような、まさしくこれからの中国の、真の暁への指針を描いて見せているようにも思えた。あと蕭乾の「夕立の女」がいい。不貞の夫とその情婦に家から放逐されて、同情を受けるべき身なのにもかかわらず、かえって世間からも村八分を食うという男社会、農村封建社会の不合理さをよく描いている。思わず私が「夕立に軒乞うひとを科女として追ひし農夫は憂き世ならずや」あるいは「塵染まぬ少年の目には哀しかり雨か涙か夕立の女」と歌を詠んでしまふほどのそこには義憤があった。同趣旨で「破鞋（中国語で身持ちの悪い女）」がこれに優るとも劣らない。他にも文革関連で残雪という女流作家の幻想小説に独特のものがあり（「弟」「余所者」など。表立って文革を批判できないのだ。すれば掴まつてしまふのでこのスタイルに逃げたとも思えるが、しかし却つてそれが小説に趣旨と力を与えている）、また、詩小説、とでも云うべき廃名の「桃畑」、あるいは鉄擬の「十

二夜」などなど、キラ星のごとく名作があつて、それらは余りにも見事であり、小説の手法においても主題においても私は新境地へと誘われる思いがしたものである。

まさに出会いであつた。

エッセー返歌「生死場は無体のかぎりわが身には死ぬるもくやし蕭紅たらむ」



さて次はお隣り韓国である。ここにも少なからず名作秀作があつたが前記同様一編を上げよう。全鏡隣の「メリーゴーランドサーカスの女」。商売女をしながら国内をあちらこちらと移り住んでいる女がいて、その女がどことも知れない小都市に流れて来た。たまたま町に来ていたサーカス団に雑務係として雇われるのだが実際は団長の情婦も兼ねているのだ。女は虚ろそのものといった心の持ち主であり、他の団員、空中ブランコの男や道化師にしても皆どこか斜にかまえていて、サーカス団全体が虚無に充たされたような、一種特殊な磁場に存するかのようである。所詮世間なんて背徳と欲望が本音でしかない、生きるにも値しない所とでも云いたげな、投げやりなニヒリズムが小説全編にひそんでいる。そんな虚ろのあまりある日ある時女は突然空中に浮かんでしまう。心

の虚ろが身に転じたかのごとく突然空中浮遊してしまうのだ。しかしそこで喜んだのは客の不入りに悩んでいた団長で、種も仕掛けもないまたとない見世物として女を売り出すこととなる。見世物は当たり客足が増すのだがしかしこれもある日突然女は解雇される。サーカス団もテントをたたんで町から出て行くこととなつてしまう。わけをたずねる女に団長がテントの表を指し示す。

見ればなんと街中の人間たちが空中に浮かびながら通りを行き来しているではないか。彼女のみならず、町全体、国全体に虚ろが表出したことを、彼女は今や知るのだった…。

韓国ほど受験競争がきびしい国はほかにないだろう。そしてそれが恰もそのまま社会で、終生、繰り返りげられるような生存競争のきびしい国もないのに違いない。「パリ、パリ（早く、早く）」とせかす声に終生追い立てられるような、互いの互いに対するせこさに満ちている国？…とでも見えてくる。事実同国の他の小説で、あるビジネスマンの家庭を描いたものがあるのだが、家計・残業尽くしの仕事・会社での人間関係・子供の教育・投資などなど、あたかも分刻みのごとき、時間に追い立てられるような毎日の生活が描かれている。果ては「韓国を見限つて米国へ移住…」とか、「いや、カザフスタン(ウ

ズベキスタンだったか?)がいい。(石油)投資に持つて来いだ。住むならカザフスタンだ:」などという会社や家庭での会話があつて、時間・空間的に生き急いでいる観が否めない。しかしそれでいながら筆頭にかかげたような、疲れ切つたような社会の一面もあることも確かなのだ。同国の自殺率は世界一であるとも云う。世間体や生存競争のせせこましさと人間原存在との矛盾、また都会と田舎に住む人たちの間におけるあたかも異国人同士でもあるかのような意識の違い、果ては朝鮮戦争時における同民族同士での殺戮の惨さを、無理にでも封印してしまつたかのような闇の意識もまた残つていて、これらの無明を探り行くような同国現代文学の使命は重かるう。♪アーリラン、アーリラン:♪と歌いながらこの民族が悲しみの峠を越えて行くような、「アイゴー(哀号)」の悲哀が民族の素地として感じられる。普段に見せるエネルギッシュな表面とはまつたく異質の、しかし愛すべき、民族の同苦同悲の結託が一大事には出来るようだ。さて私の処方箋行脚も終わりに近づいた。東南アジア、ミャンマー、ベトナム文学を記したい。ミャンマー小説には仏教からの観点が随所に見られ、例えば実に奇妙な商売がひとつあつて、捕らえてきたスズメ数十羽を檻に入れて持ち歩き、お金を払えばその人の眼の前で蓋を開

けてこれを逃がしてやるのである。曰く「これであなたは生き物を助けたという功德を積みました」となるのだが、しかしそれならば始めつから捕まえない方がいいではないか。これほどさように仏教からの価値観が特に男性作家に見受けられるのに対して、他方でそれに相克する(?)ような女性陣の現実的な強さがあつて、たとえばキンフニユという女流作家の「甘い微笑」には外国人である私でさえ生き行く勇氣と指針を与えられた。年老いた親に加えて同居しているこちらも老いた叔母がいるのだが、彼らへの養生や死後の葬式代に頭を悩ませている女性が主人公。この状態を悲観ばかりしてないで、解決すべく彼女は八面六臂の打診を関係官庁や寺社関係者にして行く。文面からにじみ出てくる、我々読者にも感得できるような彼女の前向きな姿勢と、それゆえの人から愛される人柄に呼応したような、親切な寺社関係者が一人あらわれて、安価に葬式を済ます方法を彼女に教えてくれるのだった。ラストの述懐がいいのだ。原文は不確かな記憶になつてしまつたがおおむね「こうして私は彼ら(親と叔母)が安心して死に行けるような環境を整えることができた。人は誰でも死ぬ。私もそうだ。ふりかえつてこの、死ぬる、安心して死ぬことができる」ということほど人生を送り行く上で勇氣を与えられるこ

とはない。人生を逆算しよう。人に迷惑をかけずに死ぬることが保障されているなら、私は毎日の暮らしを頑張るに過ぎない。死というステップに立って見て、初めて逆に生が見えてくる。なぜ、何のために人は生きるのかということまで、肌感覚でわかるような気もするのだ。J氏（寺社関係者）のあの折りのやさしげな微笑が、まるで仏様のお顔に見えて、よく悟ったな、それでいいのだ。真の人生の意義に立った、これからの日々を送るように、と云われているようにも思えたことだった」という風に記憶している。キリスト教に云う「主はみずから助くる者を助く」の通りであることを、この主人公の生き行く姿勢からまざまざと見せられる。そこには人が手助けしたくなるような、彼女の前向きさがあるのだろう。仏教で云えば「依正不二」「色即是空・空即是色」ということになるだろう。棚からボタ指向ではいつまでたつても真の幸せ、真の充実は来ないのだ…。

さてラストがベトナム小説である。スアン・テウウの「クワンティエンの伝説」を上げたい。ベトナム戦争からの題材ということで悲惨極まりないものを予想したのだがさにあらず。なんと北ベトナム軍女性兵士と猿のあいだにおける性的なものも含めた(?) 情の交流を描いているのである。戦争という極限時下、人と獣のあいだ

にも至ってレアなことが起こるようだ。しかしこのレアな交流を神と人間の間の交流、絶対的禁断な領域まで含めて比較、検討されていて、私はまことに意表をつかれたことだった。神、仏との交わりは神聖なものであらねばならない、清廉なものであるべきだということに異存はないが、はてそれは方やが絶対的な、且つ至高なるもので、方やが卑近でしかないものであり続けるのだろうか？ 交わることにない永遠の平行線のままだろうか？ 彼のルネサンスの巨匠ボッティチェリの「神祕の降臨」には天使と人間が抱き合っている光景が描かれている。またわが国の歌人釈超空の歌で「人間を深く愛する神のゐてもしもの云はばわれのごとけむ」なる一首がある。絵

和歌ともあたかも神と人との合一を示しているかのようだ。このことは所詮頭ではわからない。まして私など卑近きわまる存在では不可能事と思えるが、しかし文字どおりサルが神を思慕するがごとくに、愚直に迫ってみようとも思うのだ。その悪戦苦闘のさまを「みなせ2」の方々の文芸誌「あおむしさん」で、原題から一語を取ったわが拙著「クワンティエンの夢」の中で追求しておりますので、みなさんにはぜひ一覽いただきたいものです。サルがこのスアン・テウウの小説の主人公、ムイ女性兵士を追うがごとき様をお笑いだきたいと思います。

さてかく縷々と記して来たごとくアジアの人たちの等身大の姿を私は小説から知ることができた。それはニュースや観光旅行などからは伝わってこない、時空をさえ超えた、彼らとの生きた出会いであった。ミヤンマーの小説界の重鎮であるマウン・ターヤの日本語版への序文で「まず関心を持ち、次に知ろうとし、そして関わってみて、理解することができる」とあり、その言を地で行く思いがしたものである。人間の原点に立った、先兵としての、生きた小説には「力」がある。偏見や無理解の壁をぶち壊すことができる。ナショナリズム、民族の壁さえも。そのごとくに私における対人関係の壁をも突きくずして行きたいものだ。六十三年におよぶ悪習のしがらみはしつこく、強大ではあるが、キンフニンユの「甘い微笑」にいつか邂逅すべく、ただに努めて行こう。蕭紅の小豆ぼうやに、「ごめんね」と詫びて、ともに蓮花池で遊びたいものと思うからである…。

(アジア各国の短編集を邦訳された方々に感謝します。この方々の才能と努力がなかったらば、いかなる出会いもあり得なかつた…)



Photo AC より借用